



第二次欧洲大戦 前史と緒戦

外交・思潮・人物像

清沢 洌

書肆心水

目
次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第一篇 戦争の前奏と背景

第一 第二次欧洲大戰の勃発

- 一 戦争は何時始まったか 25
- 二 熱情漢と冷静人 27
- 三 ドイツ軍のポーランド侵入 29
- 四 直ちに戦時体制に入る 30
- 五 正義と正義との衝突 32

第二 ナチ外交の理論と実際

- 一 戦争とヒトラーの責任 36
- 二 ヒトラーの七ヶ年 38
- 三 ナチスの二大特徴 40
- 四 ローゼンベルグの外交政策 42
- 五 ヒトラーの外交指標 43
- 六 条約輕視の哲学的根拠 45

第三 ヴェルサイユからナチ膨脹まで

- 一 第一次世界大戦の結末 49
- 二 ウィルソンの休戦条件 50
- 三 ドイツの払った犠牲 52
- 四 ヒトラーを生んだ諸原因 54
- 五 ナチス出現後の国際関係 56
- 六 欧洲の不和を利用す 58
- 七 西部国境を復旧す 59
- 八 ヒトラー外交の三方法 60

第四 ミュンヘン会議前後

- 一 ヒトラーの六つの目標 64
- 二 ズデーテンランドの危機 66
- 三 英首相のドイツ訪問 68
- 四 チェンバレンの第二回訪独 70
- 五 ミュンヘン会議開かる 71
- 六 四国協定の内容 73
- 七 ソ聯とポーランドの提携 75
- 八 チェコ併合の意義 77

第五 チェコ合併から破局まで

- 一 英国の態度急変 81
- 二 英国とソ聯の交渉 84
- 三 独伊の軍事同盟 86
- 四 ヘンダーソンの報告 88
- 五 仏国大使の報告 91

第二篇 戦争突入以後

第一 開戦直前の裏面外交

- 一 突然発表の独ソ不可侵条約 99
- 二 ドイツの対ポーランド要求 102
- 三 英独の対立漸く顕著 104
- 四 ヒトラーの対英工作 106
- 五 ドイツの期限付要求 108
- 六 独外相と英大使の感情的衝突 110
- 七 ポーランド全権来たらず 113
- 八 ドイツ側の見解 116

九	ムソリーニの平和工作	118
---	------------	-----

第二 戦争の進行と英独の主張

一	英仏の最後通牒	122
二	ヘンダーソンのヒトラー観	124
三	ドイツ側の主張	126
四	イタリアと独ソ協定	130
五	独軍とソ聯軍の握手	132
六	ミュンヘン爆発事件	134
七	戦争の見透し	135

第三 第一次大戦との比較

一	イデオロギーの問題	142
二	相似性と相違性	143
三	戦争忌避の努力	145
四	特異性は何か	147
五	戦争への準備	149
六	空軍と潜航艇	151
七	ナチスに対する反感	152

第四 和平の条件と工作

第五 交戦国の宣伝戦

- 一 戦争に二つの特徴 155
- 二 英仏側の和平条件 156
- 三 ドイツの和平条件 159
- 四 中立国の調停運動 161
- 五 ソ聯の欧洲進出の反響 163

第六 戦後、世界新秩序の諸案

- 一 各地から来る電報 167
- 二 英独国民心理の相違 168
- 三 ビラ撒き戦争 170
- 四 どの程度に信ずべきか 172
- 五 宣伝と良心の問題 173
- 六 ウエルズと宣伝 175
- 一 対手はヒトラーかドイツ国民か 178
- 二 ショーとローマ法王の案 180
- 三 ウエルズの平和機構案 182
- 四 ノルマン・エンゼルの建設案 184
- 五 現実的学者とドイツ外交官の主張 186

第三篇 中立国の動向

第二 ソ聯の立場

六	ストリートの欧州聯邦案	188
七	ラスキ教授の提案	190

一 ソ聯外交の發展的变化

197

一 レーニンとスターリン

197

二 英仏と提携を拒絶

199

三 ソヴェト外交の二重性

201

四 スターリンの外交観

202

五 バランスを握るソ聯

205

六 ソ聯外交の肚

206

二 フィンランドと赤色帝国主義

208

一 ソ聯の侵略論理

208

二 二つの事実

209

三 ソ聯帝国主義の原因

210

四 ソ聯進出の影響

212

第二 イタリアの立場

第三 米国の立場

一	イタリアの地位と要求	215
二	イタリアの中立維持の理由	224
三	ベルリン・ローマ枢軸	224
四	イタリアの強味と弱味	225
五	ドイツの希望による	227
六	戦争の場所が関係薄し	228
七	国防上の必要から	229
八	経済的理由	231
九	何れが利益か	232
一〇	米国外交と防共協定	237
一一	説教好きの米国	237
一二	ローズヴェルトの政策	238
一三	米国の三大政策	239
一四	当局者の焦慮	241
一五	米国の積極的になった要素	243

第四

バルカンへの波紋

- 二 欧洲に対する米国の干涉 245
 - 一 大統領親書の影響 245
 - 二 大統領の弱味 248
 - 三 対欧政策の積極化 249
 - 四 第一次大戦の回顧 250
- 三 中立的英仏援助 253
 - 一 ローズヴェルトの宣言 253
 - 二 中立態度の変化 254
 - 三 ドイツに対する反感 257
 - 四 中立法の修正成る 260
- 一 ヒトラーとスターリンの握手 263
 - 二 独ソ目標の転換 265
 - 三 欧洲における民族の重要 266
 - 四 バルカンの勢力分布 269
 - 五 バルカン会議開かる 272

第四篇 戦争関係の人物

第二 ヒトラー

- 一 既に神秘的な存在 279
- 一 舞台の歴史的人物 279
- 二 両独裁者の比較 280
- 三 ヒトラーに似た男 282
- 二 彼の生立 283
 - 一 兄弟に対する無関心 283
 - 二 美術家になる志望 284
 - 三 ヴェーリン時代 285
 - 四 大戦に志願す 287
 - 五 何よりも民衆を擡んだ 288
 - 六 ナチの誕生 289
- 三 一九二三年十一月八日 290
 - 一 ミュンヘンの犠牲 290
 - 二 獄中で書いた『わが闘争』 292
- 第二 チェンバレン
 - 一 商売人出の彼 294
 - 二 五十歳で政治家へ 296

第三

ムソリーニ

三 国内政治から外交へ

297

第四

ジョセフ・ベック

一 客観的現実的な彼

299

二 努力と情愛の生活

301

三 波瀾万丈の政治生活

302

第五

スターリンとモロトフ

一 ポーランド外交を担う

305

二 ポーランドを独立せしめた志士

306

三 外相以前以後

307

四 ベックとヒトラー

309

第六

ローズヴェルト

一 墓場にも階級がある

311

二 秘密主義の人事

312

三 モロトフは法律家出身

312

一 陽気で楽観的

314

二	彼の海軍趣味	315
三	中庸よりは少し左	316
後記		317

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第二次
歐洲大戦

前史と緒戦

外交・思潮・人物像

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

凡 例

一、本書は清沢冽著『第二次歐洲大戰の研究』（一九四〇年、東洋經濟出版部刊行）の新組復刻版である。付録資料類は省いた。書名は本書の特徴を明らかに示すように変更した。

一、仮名遣いは新仮名遣いに置き換え、漢字は新字体（標準字体）に置き換えた。「廿」「卅」は便宜的に「二十」「三十」に置き換えた。

一、引用符としての鍵括弧の用法は現在一般の慣例によって変更し、書籍名（白書、青書、黄書を含む）は『』括りで統一した。雑誌名と新聞名における鍵括弧の有無は元のとおりとし、鍵括弧のある場合、その形状は『』に変更して統一した。（元の文章で雑誌名、新聞名に鍵括弧が付いていない場合は、例えば、「米国の評論雑誌ニュー・レパブリックは」のように雑誌名あるいは新聞名であると分かるような記述がされている。）

一、当て字は仮名に置き換えた。

一、踊り字（繰り返し記号）は「々」のみを使用し、その他は文字に置き換えた。

一、送り仮名は加減して現在標準的な範囲のそれにした。

一、現在、読みやすさを旨とするものにおいて漢字表記が避けられる傾向のあるものは仮名表記に置き換えた。（例「屢々」「齋す」）

一、読み仮名ルビを付加した。

一、文の区切りを明確にするために句点を付加したところがある。

一、明らかな誤植と、誤用と言える用字（牒報＝最高調＝「互格」など）はそれと示すことなく訂正した。

一、ごく近接するところでの表記不統一は統一した。固有名詞の不統一は全体的に統一した。「イタリー」「イタリヤ」の不統一では「イタリー」が大多数だが、現在の慣例を考慮し、「イタリア」で統一した。

一、本書刊行所による注記は「」で括って示した。

一、注番号は章末にまとめる形式が基本となっているが、例外的に節末に配置されている場合があるので、それは章末に移動するか、章末にまとめて番号を振りなおすかした。

序

慶應義塾に時局問題を解説する講座がある。三井高陽男の寄附になったものだ。その講座で第二次欧洲大戰に関して八回にわたる講義をしたのを中心に書きあげたのが本書である。

該講座の目的は、時の問題を学生に諒解させるためであるけれども、しかし本書の著者はそれが大学の講座であるに顧みて、単なる目前の事象を説明するに止まらず、問題を少し掘り下げて研究してみたかった。だがまたその研究は講義の時間が限られているのと、かつ事実を追うことの必要から、論究的であるよりは歴史的であり、「何故に」であるよりは、むしろ「如何にして」であらざるを得なかった。

右様の機縁で出来た本書は、全部ほとんど書下しである。中に一、二雑誌、新聞に発表したものはあるけれども、それもこの書への収録を予定して執筆したものであるから、記述の一貫性を妨げるものではない。著者はとにかくにも、第二次欧洲大戰に関する統一的な記録が、後に現るべき多くのものの先駆としてここにささやかな姿を顯したことを自慶し、この機会を与えられた慶應義塾と、該講座の寄附者三井高陽男にまず以て謝意を表する。富豪の寄附が、いままじ人文科学と学問の発達の上に重からんことは、著者の以前からの祈願である。

本書において著者は戦争責任の处在や、交戦国の挑発行為に関する是非の判定を下すことを出来るだけ避けた。国際関係においては一方だけが絶対に正しくて、他方だけが全部間違っているというようなことはない。第二次欧洲大戰は、これを客観的にいえば、国際間の集团的失敗（コレクチヴ・フェイルチャー）であり、これを主観的にいえば、それは

ヘーゲルの所謂「戦争は正義と正義 (Recht gegen Recht) の衝突」であらう。

第二次欧洲大戦においてヒトラーの演じた役割は極めて重要で、それを除いて今次戦争を語るわけにはいかぬ。そのヒトラーは何故に戦争に赴いたか、少なくともかれの判断一つでこれを避け得たと考えられるに拘らず、避けなかったか。それは政治問題であるよりもむしろ心理問題だ。政治学の教室で研究さるべき問題であるよりも、心理学の研究対象となるべき問題だ。一人の人物が、あれだけの広大かつ絶対の権限を有している以上は、その判断と対策が全局の鍵を握っていたのは云うまでもない。

ヒトラーが何故に絶対的な権限を握り得たかといえば、それはナチスの機構の上に跨がっていたからだ。ここに来ると、我等は心理学の教室を出て政治学に来ねばならぬ。そのナチスはドイツにおいて何故に急激な発展をみたかについては、その国内情勢の觀察において社会学の立場からせねばならぬ。しかしそうした社会情勢を招致した責任は、強圧政策をとった戦後仏国が負わねばならぬし、反対にまた、その当時は自己の伝統的政策から仏国に反対してドイツに加担し、「敵」の力を培養した英国の矛盾した政策も咎められねばならぬ。ここでは我等は国際関係学の分野に当面する。

今次戦争の原因を考える場合に、結局はヴェルサイユ媾和条約に辿りつくとして、そのヴェルサイユ条約が苛酷に過ぎたというだけでは説明は不充分だ。国運を賭し、対手を憎悪することによってのみ遂行出来る戦争の終末において、その当の対手国に対し寛大でありうるであろうか。また仮に政治家がそう考えても、過去何世紀にわたる民衆の恐怖感はその上を實際政治の上に可能ならしむるであろうか。或いはまた、ドイツに対する寛大な政策をとることが利益であるとの考えは、実は理想主義者の安易な想像であつて、現実的にはドイツの分立にまで及び、その組織を英国が武力を以て保障することが人類文化の現段階においては却って平和への道ではないのか。そうした英仏側から起りうべき疑問も当然歴史の分野に属するであらう。

こうして第二次欧洲大戦を説明するためには、学問の全分野に互らねばならぬ。しかし現在の著者にとってそうした広汎なる研究が不可能であることは説明するまでもない。殊にこの書は開戦後二ヶ月にして稿を起し、戦争と共に筆を

進め、稿了したのが開戦丁度半歳にすぎず、手許にある資料は極めて限られたものであった。その点の不備は読者の諒察を乞わねばならぬ。

ただ著者は国際関係は常に広い視野の上から観察されねばならぬことを主張するものとして、その心的態度においては努めて公平であらんことを期した。しかしそれに拘らず、もし多少とも一方に偏倚しているところがありとすれば、それは材料の蒐集難と、また人間は結局自己というレンズを通す以外には外界を観ることが不可能であるによる。戦争の必然性を説く場合にも、個人の野心や政治家の愚鈍性が国家を戦争という大犠牲に追い込む事実を叙述するに当って、著者の筆と口とは自然に憤怒に燃えることをどうすることも出来ないのである。

この著を書き終えたのが丁度著者の満五十歳の誕生日前後であったことが著者個人にとっての感慨である。なお編集に当って源川公章君の援助を謝する。

日本紀元二六〇〇年、西洋紀元一九四〇年二月

清沢
洸

SAMPLE
Shoshi-Shirashi.com

第一篇

戦争の前奏と背景

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

ドイツの立場

ドイツ民族が、その国家社会党の指導の下に、恐るべきヴェルサイユ条約の桎梏より脱し、且つこの危機から生き抜けんとするや、この時早く、すでに英国の包囲政策はいま一度始まったのである。

——アドルフ・ヒトラー——

(一九三九年九月三日)

英帝国の立場

我等は平和を樹立するために、如何なる国家にとつても、これ以上の方法のないだけの努力を払った。しかしながらドイツの支配者が与うる言葉に信なく、国家も国民も安全を感じえない事態は最早堪うる事が出来なくなつた。我等はこれを終止する決意をしたのである。

——ネヴィル・チェンバレン——

(一九三九年九月三日)

第一 第二次欧洲大戰の勃発

一 戦争は何時始まったか

一九三九年九月一日午前五時十一分に総統ヒトラーのドイツ国防軍に対する発令が出て、ドイツの世界に誇る武力は動き出した。それはスウィッチによって動く機械の正確さにも似ていた。

ドイツ軍がポーランドに侵入することにより正式な戦争は開始されたが、しかし世界は必ずしもこれを突発事件とは見なかった。欧洲において早晚戦争が開かれるであろうことは、多くの人の疑わなかったところである。問題なのは何時、何を機会に勃発するかという点だけだった。欧米に「神経の戦争」(War of nerves) という文字が流行していたことは余程前からである。この「神経戦争」においては、戦争道徳で鍛えられて居り、一部においては「文明的野蛮人」(civilised barbarian) などとすらいわれているドイツ人の方が、遙かに耐久力が強かった。神経線の太いドイツ人と、神経線の細い英、仏人とは後者に勝ち歩はなかった。戦争が始った時に、パリやロンドンの街頭では、「あんな不安な気持ちも何時までも続けられるものではない、戦争の方が却っていい」といった会話が行われて、戦争にむしろ安定した気持ちが見出されるという状態であった。同時にまたドイツの方にもそうした気分は確かにあった。ベルリン一日発の同盟通信には、「既に独、波両国の間にダンチヒの危機が叫ばれてから、忍び寄る危機は次第に国民の胸を圧して来た、英独交渉が開始されてからでも既に一週間、次の一週間にどんな重大な事態が起るかも知れぬといった切ない恐怖感に

苛なまれながら、不安なその日その日を過ごして来た国民にとっては、どちらでも良い、何とか決ってくればとにかく心のしこりは解けようというものだ。戦争の開始によってホッとした気持ちに浸っているのはこうしたわけだ」と打電して来ている。開戦前の緊張と不安の情を見るべきだ。

だから第二次欧洲大戦が正確な意味において何時始まったかは、その当ても問題になり、将来も問題になると思う。九月一日にドイツ国防軍がポーランドへ進駐した時を以て戦争が始まったと見るべきか、越えて九月三日、英、仏両国が対独戦争の存在を声明した日を以て開戦日となすべきか、それともドイツがチェコスロヴァキアを併合した三月を以てその日となすべきや、ないしはまた英仏が外交的に惨敗を喫したミュンヘン会議を以て開戦の日となすべきかである。だがここまで遡ればヒトラーがオーストリア侵入（一九三八年三月）を想い出さねばなるまいし、更にまた武装を以て進撃したラインランドの占領（一九三六年三月）もあげなくてはなるまい。そうなると、一九三三年一月のヒトラー出現がすでに戦争的姿勢においてであるから、その時が戦争の第一日と見る観方も可能だ。それならば何故にヒトラーが出て来たかといえ、ヴェルサイユ条約に対するドイツ人の反感であるから、その締結の日が、即ち第二次欧洲大戦の発生日だともいえる。この意味からいえば戦争なき戦争は二十五ヶ年続いたことにもなる。

こうして厳格な意味における戦争発生日を規定することは困難で、それは一貫した因果の絵巻物だ。同時にこの第二次欧洲大戦に対しては、欧洲当事国がいろいろな意味で、これに備えていたことを語るものがある。だが今やドイツ国防軍が総統ヒトラーの命令によってポーランドに侵入を開始したのである。「ポーランドは善隣関係を確立せんとする予の努力を拒絶し、武力に訴えるの挙に出でた。ポーランド領内のドイツ人は今や流血暴虐の犠牲となり、その家を追われるに至った。武力に対しては武力を以て対抗せよ。予は総てのドイツ人が全力をつくして、各自の義務をつくさんことを期待する。汝等は常に国家社会主義、大ドイツを代表するものなることを忘るることなかれ、ドイツ民族、ドイツ帝国万歳」、これがヒトラーの非常命令の要旨であり、この発令と同時にドイツは素早く軍事行動に移った。

この日の午前十時、日本では丁度大震災の十六年忌と、興亜奉公日の第一回が重なって人心が肅然としていた時、ベルリンでは国会が開かれて、総統ヒトラーの記念すべき演説があった。平生は褐色ナチ制服のかれが、珍しや今朝は緑

色の軍服姿である。かれはかつて一兵卒として世界大戦に馳駆して負傷した。それから恐らくは最初の――でなければ極めて稀な軍装であろう。

「私は今やわが民族の一兵卒であります」と彼は云った。かつてはその国の名君フリードリヒ大王が「予は国家の最善の召使いだ」といったと同工異曲だ。「指導者」は結局民衆に奉仕するものなのだ。その時に「かれは垂れ下がる髪の毛を左手でかきあげながら、右の拳で空間を叩いて咆哮した」と日本の或る新聞特派員は伝えた。

「私は再び軍服をつけた。勝利か、死か、これが私の金言である。不幸私が戦場に殞れることあらば、私の後継者はゲーリングである。かれまた殞れん、つぎの後継者はヘス副総理である。ヘスまた殞れんか、党の最高会議において、最も勇敢なる兵士と同時に最も忠実なるナチス党員を推戴すべきである」

それは字義なりの決死演説である。ゲーリングはこの時に四十六歳、ヘスは四十二歳、そしてヒトラー自身は満五十歳、冒険は常に若い世代によって行われる。

二 熱情漢と冷静人

その同じ日に英国の決意も後に引けないものになっていた。午前中に外務省は強硬な声明を発表して、「もしヒトラー總統のドイツ国民に対する宣言が、表面通りの意味を有するならば、それはドイツの対ポーランド宣戦に外ならない。そしてもしこの解釈が真実であるならば、英、仏両国としては全力を挙げてポーランドに対する援助義務を遂行する不退転の決意があることを断言し得る」といった。これより一週間前、即ち八月二十五日に英国とポーランドの間には相互援助条約がロンドンで調印されたのであった。

この日の午後四時過ぎ、ロンドンのダウニング街十番地の首相官邸に立派な自動車が横付けにされた。見るとそれは英帝ジョージ六世陛下御自身であられた。同日、陛下は陸、海、空三軍の総動員に御署名になったのだが、歐洲の刻々の情勢が御心配になる。さらばとて首相チェンバレンは各方面から来る電話と報告と協議に、一刻も電話口から離れる

第二篇

戦争突入以後

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

独ソの提携

歴史は、我国とドイツとの間の敵意と戦争とは、兩國のために利益ではなく、否！害悪であることを教えている。ロシアとドイツとは第一次大戦の被害者として発足した。従ってソ、独兩國国民の関心は相互に反目する方向にはなく、却って相互の平和的關係を必要とした。

—— ヴィアチエスラフ・モロトフ ——

(一九三九年八月三十一日)

ドイツはナチズムを輸出しない、ソ聯においてもボルシェビズムにつき同様の認識に立っていることが判明した、従って独、ソ兩國間の敵對關係は断乎一掃されねばならぬ、独ソ不可侵條約は即ちドイツ外交史以来の大転回を意味し、且つ決定的のものである。

—— アドルフ・ヒトラー ——

(一九三九年九月一日)

世界に再び暗黒時代を現出するに至った、もし独ソ不可侵條約の真相を暴露すれば、コミンテルンは崩壊するであろう。

—— レオン・トロツキー ——

(一九三九年九月五日)

第一 開戦直前の裏面外交

一 突然発表の独ソ不可侵条約

歐洲戦争を気構えての真剣な危機は八月二十日に始まった。この日にドイツとソ聯との間の経済協定が、その前日（十九日）にベルリンで調印された旨が発表されたのだ。^①

経済協定そのものは大した事件ではない。既にイタリアとソ聯との間にも同種のもものが締結されて居る。ドイツとソ聯の貿易関係は一九二九年にはドイツの対ソ輸出四億二千六百萬マルク、同輸入三億五千四百萬マルクという好関係であったのを、ナチ政権が出来てから激減し、一九三七、八年度には少し持ち直したというものの、対ソ輸出一億マルク、同輸入五千萬マルクに過ぎない。ナチ・ドイツの経済的国難は既に周知の事実で、これを突破するための工作であろうと考えたものも少なくなかった。

日本においてこの観方は特に有力で、平沼内閣もそうした考え方だった。新聞の如きもこのニュースを極めて小さく取り扱って、特別の注意を払ったものはほとんどなかった。これを大きな問題として考えなかった証拠としては、前年八月以来満一ヶ年以上懸案になっていた日独伊防共協定強化案（実は軍事同盟案）は、依然として閣議において継続された事実を指摘することが出来る。同時にまた東京において開かれていた天津租界問題を繞る日、英兩國の会談は、三十一日を以て突然打ち切られた。この打ち切りは防共協定強化に対する一つの強行政策と解する以外には諒解することが

困難な事情にあった。⁽²⁾

八月二十一日午前、平沼首相と板垣陸相は防共協定強化に関する談合をするために首相官邸で対座していた。途上の説によればその席上の一つの飛電が運ばれたといわれる。それは前々日（十九日）に経済協定に調印した独、ソ両国は、越えて二十一日には不可侵条約が締結されることに決定し、二十三日にはドイツ外相リッペントロップが条約調印のためにモスクワに赴く予定だということである。この報道に対しては、最早内閣も新聞も黙殺することが出来なかった。それまで新聞に内容を発表することを許さず、ただ「対欧政策」とのみ書いて来た日本の防共枢軸に関する政策は、ここで再検討を要することになった。

後報によって、この不可侵条約は到底日独伊防共協定と相容れないものであることが明らかになった。八月二十四日にモスクワとベルリンで公表された正文は左の如くだ。

独、ソ両国政府は独、ソ間の平和を強化せんとの希望に基き、且つ一九二六年四月独、ソ間に締結された中立協約の基本的条項より出発して次の協定に到達せり。

第一条 両締約国は互に相手国に対し単独たると他国と共同たるとを問わず、暴力の行使、侵略的行動並びに攻撃を為さざる旨を約す

第二条 両締約国の一方が第三国の攻撃の対象となりたる場合、他の締約国は如何なる形式においても右第三国を支援せず

第三条 両締約国政府は、将来両国の共通の利害に関係ある諸問題に付き、相互に情報交換の為常時協議し接触を保つべし

第四条 両締約国の何れも、相手国に直接又は間接に対抗する如何なる国家群の形成（grouping of powers）にも参加せず

第五条 両締約国間に諸般の問題に付き紛議ないし紛争の発生せる場合には、両締約国は同紛議ないし紛争を友好

的意見交換、或いは必要の場合には紛争解決を目的とする委員会の設立により、専ら平和的に解消せしむ

第六条 本条約の期限は十ヶ年とす、但し両締約国の一方が期限終了一ヶ年前に廃棄を通告せぬ限り、本条約の有効期間は自動的に五ヶ年延長されしものと見做さるべきものとす

第七条 本条約は可及的短期間に批准さるべきものとし、批准交換はベルリンにおいて行わるべきものとす、本条約は調印と同時に効力を発生するものとす

本条約原文は一九三九年八月二十三日モスクワにおいて独、ソ両国語を以て各一通ずつ作製せられたり。

署名 ドイツ政府代表 ヨアヒム・フォン・リッペントロップ

ソ聯政府全権 ヴィアチエスラフ・モロトフ

これを条約的にいえば、この独ソ不可侵条約は一九二六年に独外相ストレーゼマンとソ聯大使クレスチンスキーとの間に締結されたるものと大差はない。そしてそれは尚廃棄されていないものなのである。しかもこれを改めて締結し、その上に御丁寧にも「相手国に直接又は間接に対抗する如何なる国家群の形成にも参加せず」との一節を附してある（一九二六年独ソ条約にはこれと同じ意味の条項が存在しているが、他の多くの不可侵条約には見当らない）。この条約の重要性は、従って条約的ではなく、（一）英、仏からソ聯を引き離し（二）またソ聯がドイツを攻撃することのな

い保証を得た政治的な点にある。

この頃ワシントン電報（八月二十五日発）は両国の間にはこの条約の外に秘密協定があつて、ソ聯はドイツに食糧や工業原料品を提供する代りにポーランドを二国において分割する密約がある旨を伝えている。この報道は後の発展によつて事実であることが証明された。

独外相リッペントロップは、世界の視線を浴びて二十三日ベルリンを出発、二台の飛行機に三十二名の随員を従えてモスクワに行った。条約署名のためだ。かれは一時、旧オーストリア大使館に入り、そこから更にクレムリンに向い、そこでスターリン同席の上で手続きを了した——後にも書くように丁度それと同じ頃、ベルリンでは英国の駐独大使へ

ンダーソンがチェンバレンの親書を持ってベルヒテスガーデンにヒトラーを訪問した。外交交渉は今や白熱化して来たのだ。

二 ドイツの対ポーランド要求

独、ソ両国の握手は、その背後に一つの大きな目標を有していた。争いの林檎はポーランドである。

ヒトラーがダンチヒと、それに通ずるポーランド廻廊を回収する意志のあることは、以前より明らかな事実であった。一部で伝えられたところでは、かれは一九三九年三月、メーメル占領に続いてダンチヒを占領せんとする計画であったのが、ポーランドが動員し、英国がポーランド保障を発表したので、これを中止したのだといわれた。^③しかし仮に中止はしたにしても放棄はしなかった。かれは四月二十八日（一九三九年）にドイツ議会で演説して、（一）ダンチヒ自由市をドイツに合併する事、（二）ドイツ本国と東プロシアをつなぐために廻廊を横断するドイツの鉄道と公道とを敷設したい旨の要求を声明した。同時に前篇にも説いた如くポーランドの政策が親英反独的なりとの理由を以て、一九三四年の独波不可侵条約を一方的に廃棄するの挙に出た。同条約はなお五ヶ年の期限を有していた。

これに対してポーランド外相ベックは意外に強硬な態度で撥ねかえした（本書第四篇、第四ジョセフ・ベックの項参照）。ポーランドは平等の立場でダンチヒの将来について談合する準備はあるが、ドイツの如く命令を以て条件を強うるのは、ポーランドの解する「交渉」ではないといった。「平和はいい事だ、しかしポーランドは the doctrine of peace at any price（どんな値でも払う平和の教理）を解しない」といった文句もあった。三月末英国によって保障された後だけにその鼻息は中々荒かった。この演説の草稿も実は英国大使の手が余程入っているといわれている。

ヒトラーはその膨脹政策を実行して来て初めてここで真の反抗に会したのだ。その前にも関係諸国が、そうした身振りを示したことはあった。たとえば一九三八年五月にドイツとチェコとの間の関係が悪化して、チェコは動員をした。この時にドイツは一挙にして問題の解決を計る意志であったのが、もしドイツが進軍すれば英、仏両国が起つ決心だと

第三篇

中立国の動向

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

米国の立場

米国は、国家としては、飽くまで中立を維持する方針である。しかし、余は総ての米国民に対し思想的にも同様中立を守るよう望むことは出来ない。中立である場合でも、目前の事実を考慮する権利はある。中立であろうとしても、米国民は事実を前にして、その心情的しいは良心の眼を閉ざすことは出来ない。

——フランクリン・ローズヴェルト——

(一九三九年九月三日)

イタリアの立場

イタリア人の標語は「一旦緩急に備える為軍備を固めよう、平和工作に對し能うる限りの支持をなせ、沈著に現実を監視しつつ」というにある。これがファシズムの態度であり、又イタリア国民の態度でなければならぬ。

——ベニト・ムソリーニ——

(一九三九年九月二十三日)

第一 ソ聯の立場

一 ソ聯外交の發展的变化

一 レーニンとスターリン

ソヴィエト聯邦がその最初の国際會議に参加して、全権委員チチエリンを送った時のことである。レーニンは声明して云った――

「我等は早くよりゼエノア〔ジェノヴァ〕會議に参加することを決定した。吾人はよく會議の趣旨を諒解する。ロシアは取引商人の態度を以てこれに臨むべきことを隠す必要はない。けだしロシアは資本主義諸国と取引契約を結ぶことを必要とするからだ。吾等はこの取引を最も有利な条件の下に行うためゼエノアに赴くのである」

當時のレーニンの意志は明白だった。ロシアは大戦後半から引き続いて聯合國によって封鎖された。しかも彼等が確く信じた世界革命は、ドイツの場合も、ハンガリーの場合にも、口火の役をすらすらとめなかった。国内の經濟的疲弊は、国民大衆をソヴィエト反対の陣營に引き入れる危険があった。農民の反抗は、饑饉の深化と共に、既にソヴィエトそのものの存在を脅かして来た。ソヴィエト政府が一九二一年の春季共產党大会の決議を経て、所謂新經濟政策^{ネウポリチカ}を採用したのはこの時のことであり、この政策の転換を指導したのはレーニンであった。

一国の対外政策は必然に国内事情の表現である。この新經濟政策の実現のためには、従来の対外政策を変更する必要

がある。外国資本の流入を誘うために利権政策の認容が直ちに続いた（一九二一年三月三十日）。同年十一月には戦前の債務を原則として承認する条件の下に、聯合各国と一般平和を締結し、露国の経済復興に必要な資金の貸与方を日、英、仏、米の諸国に申し入れた。

丁度その頃、歐洲諸国もロシアという大市場を除外して、戦後の復興が困難であることを感じて、ロイド・ジョージの音頭取りでゼエノアに国際会議を開く段取りとなった。レーニンが「戦略的退却」と弁解しながら、しかし外国資本と機械と技術を探しに、「取引商人の態度を以て臨む」と云ったのはこの時のことである（一九二二年三月六日）。

このレーニンの言葉を頭に入れて、一九三九年三月十日から二十一日までモスクワに開かれた同聯邦共産党第十八回大会においてスターリンによってなされた声明を読むと興味がある。スターリンは資本主義諸国における諸矛盾並びに対立激化を説いた後に、ソ聯の外交方針に関し次の如く云った――

一、我々は平和を支持し、総ての国家との通常の事務的關係を強固にしよう、即ち資本主義諸国がソ聯邦の利益を毀損しない限り、この方針を厳守する。

二、我々はソ聯邦と国境を接する総ての国と平和的近接友好關係を維持せんとするものだが、これもそれらの国がソ聯邦の利益の不可侵性を直接間接に毀損しない限りにおいてである。

三、我々は侵略者の犠牲となっている民族を支持し、その独立の爲め闘争する民族を援助する。

四、我々は侵略者の威嚇に戦慄せず、戦争の放火者に対し、「打撃には打撃をもつて」これに酬ゆる決意によって赤軍と赤色海軍を強固にしつつ、国境の神聖を擁護する用意がある。

スターリンはこの四原則を声明しつつ、日独対英仏の關係を左の如く云ったという――

一、英仏は日独をしてソ聯と戦争させ、日独、ソ聯邦の三国が疲弊するのを待って、自分の筋書通りに跡始末をしようという魂胆らしいが、ソ聯邦は決して英仏のため火中の栗を拾わない。

一、日、独、伊三国は防共の名の下に、実は英仏に犠牲を払わせているに過ぎぬ。

このスターリンの言葉はリトヴィノフに代って就任した外相モロトフの第一声にも引用されているもので、スターリ

ンの有する位置から観て、右を以てソ聯の外交方針として素より差支ない。

二 英仏と提携を拒絶

モロトフ新外交人民委員が、五月三十一日（一九三九年）の聯邦民族会議において、英仏の所謂反侵略陣営への参加加入に対し、これを拒絶したことは世界にとって可成りの衝撃を与えた。それは英仏が最後まで樂觀的で、その旨の報道が普く伝わっていたのも一つの原因ではあるが、その提案が実は大体に従来のソ聯の外交方策に従ったものだからだ。一九三五年の夏、コミンテルンの第七回大会がモスクワに開かれ、その席上で従来の「帝国主義戦争に転換せよ」の標語を「ファッシズムに対する全面的抗争」に変更してから、ソ聯はファッシズムに対抗するために、有らゆる方法をとった。アムステルダムを中央部とする第二インターナショナルにも呼びかけたし、またドイツ内部のカソリック教徒にすらも働きかけた。更に仏国及びスペインの人民戦線政府に対する好意は世の知るところである。

これ等の試みはほとんど成功を見なかったけれども、ソ聯の熱意は依然として醒めなかった。前外相リトヴィノフは「平和の不可分性」を説いて、東と西とに地位する各国が、相共にファッショ国に抗する必要があるを説いた。そしてこれには国際聯盟の集団保障機構強化の要を強調した。

このリトヴィノフの提唱に最も冷淡なる態度を持したのは英国であった。一九三八年の四月、ドイツのオーストリア合併の後を受けて、ソ聯政府はファッショ国に対抗するための大國際會議を開くことを提案したのであるが、英国保守党政府は、ほとんど何等これに耳を藉すことなく一蹴し去った、首相チェンバレンはその所謂アピースメント政策を以てドイツを懐柔しうべしと考え、オーストリア合併には事前にある種の黙諾さえも与えたともいわれる。その後、同年十月のズデーテン・ドイツの合併に際しても、ソ聯の猛烈なる抗議にも関せず、英仏はこれを白眼視し、ミュンヘン會議にはソ聯代表者をすら招待しなかった。

この英国の態度は、ドイツのチェコ本国合併と共に俄然変化して、独伊に対する抵抗政策になった。英国案が国際聯盟第十六条に則ることといい、またソ聯を有力なる提携者として所謂対侵略国陣営を形成することといい、従来の経過

からいえば、それは明らかにリトヴィノフ外交の勝利ともいえるのだ。

図らざりき、この時にリトヴィノフは辞職し、かつ英国の提案はソ聯政府によって頭から否認されようとは。

ソ聯当局者は拒絶の理由を以て英国の提案が、片務的で、相互的ではないからだという。即ち戦争の場合に、ソ聯は結局において英仏の生存を援助せねばならぬに對し、英仏はソ聯に對しこの義務を負わないからだという。これに關してここで詳しく両者の主張を説明する紙幅を持たないが、問題は仮にソ聯の主張する如く、「侵略に反對する有力な相互援助条約」が締結されれば、独伊の進出を喰い止むるに足る團結が出現するであらうか。またソ聯にはそれに対する突き進んだ熱意があるであらうか。

ここで我等はレーニンが最初の國際會議に参加するに當つて「取引商人の態度」を以てこれに當ると声明したこと、その後継者であるところのスターリンが、「侵略国は現在では最早や防共という煙幕を使用する必要を認めず、独伊の政治家及び新聞は、右の協定が正に歐洲の主要民主主義國に向けられている旨を明瞭に言明している」とモロトフをして言明させた事実を想い出す必要がある。

もしソ聯当局が最初から防共協定の眞の目的が、共產主義及びソ聯でなくて、主要民主主義國に對してであることを知っていたならば、その協定に對してあれほど神経に病む必要はなかつたであらうし、またリトヴィノフが侵略國防圧の會議などを疾呼する必要はなかつたはずである。だがその事は大して問題ではない。我等は世界の政治家が、余程後で、とんでもない時に突如先見の明を誇るのを聞くのに馴れている。問題なのは独伊の火の手が英仏側に向けられた事を確かむるや、「我等は火中の栗を拾わず」とて、ヒトラー總統が四月二十八日の重要な大演説に一言もソ聯に触れることをしなかつたのに答えるかのように、モロトフの演説の後半部においてドイツとソ聯とは通商交渉の進捗中であることまで附言した一事である。

ソ聯は斯くの如くして今や一方の陣營に對する熱心なる協力者であるよりも、むしろ二つの陣營の中間に立つて、「取引商人の態度」を以て、よりいい条件を以て値切り倒そうとしているように見えた。

この事は二つの理由によって当然だ。一つはソ聯外交の二重性により、今一つはソ聯の有する地理的位置によってで

ある。

三 ソヴィエト外交の二重性

第一にソヴィエト外交の二重性についてであるが、ソ聯の外交は相矛盾する二つの主義の上に立っている。一つは第三インターが主張するところの世界赤化の目標であり、も一つはスターリンの所謂「総ての国家との通常の事務的關係の強化」ないし「平和的近接友好關係の維持」——普通の言葉を以ていえば国際親善政策である。

この二つは論理の窮極するところ相對立するものだ。仮にソ聯が、ローズヴェルトの提唱したところに従って国際會議を開いて、これに参加したりとするか——この提唱に最も熱心に賛成したのはソ聯だった——その事と、世界赤化とは如何にして相調和するのであるか。国際親善は必然に現状維持、赤化宣伝禁止を前提とせねばならぬ。しかも他方においてソ聯は建国の歴史から世界赤化を使命とせねばならぬはずだ。

この両頭の魔物は、しかし最初から常に内部の矛盾、従つて抗争を継続しながら現在に至っている。筆者は便宜のためにソ聯の外交を五つの階段に分つてその経過を観察したいと思う。

第一期はソヴィエト組織が成功して、その勢いは世界赤化が確實なりと彼等が考えた頃である。それは一九一八年ないし二二年頃の間であつて、ドイツにおけるヨッフエやラデックの活動、ハンガリーにおけるベラ・クンの成功により首都ブタペストが赤軍の手に歸した當時のことだ。

第二期は本文の頭初に説いたレーニンの「戰略的退却」による国際會議への参加だ。だがこの時はなお内部にトロツキー、ジノヴィエフ等が居つて、世界赤化の看板はなお下されず、両頭は同じ根幹につながつて、表裏の活動を継続した。一九二二年より一九二七年頃までがそれだ。

第三期はスターリンの独裁が完成して、所謂「国社会主義時代」に入つてからだ。特に五ヶ年計画が熱と速力を持ち出してから、その外交方針は、(一) 平和政策の徹底をはかり、(二) 国際赤化主義の運動を手控え、(三) 五ヶ年計画による対外註文によつて經濟的接近をはかる事にした。それでもチチェリンが外務人民委員の任にある頃は、従來の關係か

第四篇

戦争関係の人物

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

各国の戦争意図

ヒトラー総統は英国の戦争目的を非難しているが、今次戦闘の大目的は、周知の通り、欧洲を絶え間なく、且つ連続的に生起するドイツの侵略から救い出し、各国国民をしてその独立及び自由の維持を可能ならしめるにある。

—— ネヴィル・チェンバレン ——

(一九三九年九月二十日)

我々は国家間の真摯なる協力、忠実なる協約を常に希望し来たり、今も常に希望している。しかしながら我々は暴力の命令に対しては絶対に服従せぬ決心を固めているのである。我々は侵略に對抗して武器を執った以上は、平和の確実な保障を確保するまでは武器を措かぬであらう。

—— エドワル・ダラディエ ——

(一九三九年十月十日)

ドイツの戦争目標はドイツ国民の安定並びにドイツの勢力範囲において干渉を受けない政治を確立するにある、世界の富が公平に分配されぬ限り、今次の戦争は終熄しないであらう。

—— アドルフ・ヒトラー ——

(一九三九年十一月八日)

英、仏の戦争意図は、旧ポーランド復活の爲めは勿論、民主主義擁護の爲めでは断じてない。英、仏の戦争目標は実は彼等が公表を憚る他の点にある。即ち英、仏の支配階級が抱懐する真の目的は、イデオロギー的なものではなく、偉大なる植民帝国としての物質的権益を擁護する点にある。

—— ヴィアチエスラフ・モロトフ ——

(一九三九年十月三十一日)

第一 ヒトラー

一 既に神秘的な存在

一 舞台の歴史的人物

ヒトラー総統が五十歳の誕生日を迎えたのは一九三九年四月二十日のことである。

現在の舞台に踊っている役者の中で、かれは年齢においても経歴においても一番若い。年齢においては英国のチェンバレンが一番の年嵩で七十歳、スターリンが六十歳、つぎがローズヴェルトで五十七歳、ムソリーニが五十五歳、ダラディエが五十四歳（いずれも戦争勃発当時）、それから彼だ。何れも西洋流の数え方だから日本流に直すには一つないしは二つを加えればいい。

経歴からいえば一番長く権力を握っているのはムソリーニで、もう十七ヶ年余になる。それからスターリンが十六ヶ年余、ローズヴェルトが七ヶ年足らず、ヒトラーは開戦当時で約六ヶ年半である。

後世の史家は世界歴史を語るのに、前にあげた名の一つをも除くわけにはいかぬ。しかし最も筆太に書くであろうのは、何といってもヒトラーだ。現在においては一番若い、これを歴史人と比較すると、ウォータローにおけるナポレオンよりも四歳の兄さんであり、そしてアレキサンダー大王の死期に比して十七歳も年上だ。

後世の史家はヒトラーを云う時に、誰よりもまずその平行線をナポレオンに引いてみるであらう。ヒトラーとナポレ

オンとの相違は、ドイツ人と仏国人との相違だ。前者がどこか重苦しく、後者が軽快なのは、ドイツ文化と仏国文化との比較である。

だが生るべき者が生れる歴史の鉄則は両者を通して同じだ。仏国革命が余りに行き過ぎ、社会崩壊に面するに至って、仏国の社会情勢はナポレオンの人物と思想と手腕を必要とした。同じように戦後引き続いた社会民主党の左翼的階級政治は、ヒトラーのナチズムを要望するに至った。廻る因果の小車は、ただに仏教的人生観のことばかりではない。時が来るまでは、同じヒトラーの雄弁はかれを獄舎に送るに過ぎなかった。

二人の相似性はここで終る。ナポレオンは生れて天稟の軍人だ。ヒトラーも軍人たることに変りはない。かれの胸間にかかる唯一の勲章鉄十字はかれの勇敢なる奮闘を物語る。しかしそれは必ずしも大軍を叱咤する将帥としての天才を意味しない。かれはむしろ大衆の指導者である。

ナポレオンは優れた軍人が多くそうであるように演説が嫌いであった。これに対してヒトラーの雄弁は天下に有名だ。ナポレオンは到るところで艶名を流した。かれの行くところ仏国の酒は常にその側近にあった。ヒトラーは後にも説くように酒を吞まず、煙草を喫せず、婦人を近づけない。

二 両独裁者の比較

比較に話が及ぶと自然にヒトラーをムソリーニに比べてみたくなる。

どんな点からもヒトラーの方がムソリーニよりも後輩だ。一九二三年十一月八日ヒトラーはミュンヘンで一揆を起した。それはムソリーニが「ローマ進軍」に成功したことから思いついた模倣だった。これが失敗したことをかれは却って後には感謝し、その旨ゲーリングに手紙を送って居る。

かれはまた英国の新聞記者ワード・ブライスに語った。「僕はムソリーニのやり方を余りに、そのまま実行しすぎたのだ。僕はミュンヘン一揆を以て一気に『ベルリン進軍』に発展させ、そして直ちに権力を取ろうと考えた。その失敗が僕に教訓を与えて、各国にはそれぞれ異なる型があることを悟らせたのです」と。

所謂民主主義国から如何なる批難があろうとも、かれの行動は決して非合法的ではない。かれは選挙と国民投票によって一歩一歩その権力を得たのである。

ヒトラーがムソリーニから最も多く学んだといっても、その運動の方向は、結局かれ等の性格が異なる如く異ならざるをえない。それはまた仏国人と然る如くドイツ人とイタリ人との相違だ。

ムソリーニは速力を好む。自ら飛行機と、自動車と、モーターボートを運転する。これに対してヒトラーは汽車も一時間三十五マイル以上を走らせない。もつともこれはかれがムソリーニのように事務所でも直ぐ眠りをとれる体力を持たないからでもあろう。そんな関係からその専用汽車には寢室に続いて大理石の風呂場が備えつけてある。

ムソリーニは総てに気軽だ。かつて新聞記者であつただけに誰にでも会う。会えばよく語る。ヒトラーの方は人に会わない。ドイツでは「一国の元首だから」というが、同じ元首でもローズヴェルトなどはよく会見する。会って話し出すと、一人で演説のように独語的調子になるか、ないしは相手の云うことを黙って聞く。

ムソリーニは政治的で、ヒトラーは宗教的だ。

前者は客観的であり、後者は主観的だ。ヒトラーもムソリーニも活動家であるのは同じだ。ラインランドに出兵した時のことだ。かれは二日二晩寝ずに事務をみた。三日目の晩にゲッベルス夫人その他を晚餐に招いて、好きな映画を午前十時まで観覧した。ゲッベルス夫人が「お疲れでしょうから、お休みになったら」というと、「どうぞ、もう少し居つて下さい。お帰りになつても僕は四時までには本を読んで眠りませんから」といった。

ムソリーニもエチオピア攻略の時には、幾日も机の前を動かなかった。疲れると椅子に仰向いて眠って、また仕事をすると一日が続いた。

ヒトラーがしばしばベルヒテスガーデンに行くのは、考えるためでもあるが、またよく睡眠をとるためでもある。ベールリンに居ると、食後必ず睡眠剤と消化剤を少量吞むのが常だ。かれは公務の許す限り毎日お昼頃まで床を離れない。考えるといえ、近頃ムソリーニが日曜に教会へ行くそう。これは神信心もあるが、そこで祈りをしたりしている時に、静かに考えるためだろうと云われている。政治家には大きな問題について考える時間が必要だ。